

地域の宝としての最上川

下平裕之
(山形大学人文学部)

はじめに

本稿は、今年度ベストティーチャー賞(学生投票)受賞記念として行った講義に基づき、私が担当した「最上川俯瞰講義」の概要と、地域の宝としての最上川を地域活性化に活かすための視点について紹介するものである。

1. 最上川俯瞰講義の紹介

基盤教育科目「最上川俯瞰講義」は、「大学コンソーシアムやまがた」の単位互換科目として平成21年度から開講されている。シラバスによれば、本講義のテーマは「最上川の自然と文化について専門家のさまざまな視点から学ぶ」であり、「最上川について多角的に学ぶことを通じて山形県における自然と人間との共生のあり様を学び、同時に河川と人間との多様な関係についての理解を深める」ことを目標としている。山形県を流れる最上川は源流から河口まで229kmに及ぶ広大な河川であり、その流域の人々の暮らしと深くかかわってきた。この講義では、最上川に関連する各学問領域の教員のリレー講義により、学生が最上川の持つ独自性と多様性を学ぶことを意図している。

本講義の開講主体となっている大学コンソーシアムやまがたとは、山形県内の大学・短期大学・高等専門学校・放送大学等の教育機関と山形県の連合組織で、「ゆうキャンパス」の愛称で親しまれている組織である。各機関が相互に連携し交流を推進することにより、山形県内の高等教育の充実・発展を図るとともに、各大学の知的資源を有効に活用して地域社会に貢献することを目的としている。

今年度は以下のような講義内容により、学生が最上川を多面的に理解するためのプログラムを提供した。なおそれぞれの講義の実施に当たっては、山形

大学の教員の他、大学コンソーシアムやまがたのコーディネートにより、東北文教大学短期大学部、福島大学、NPO 法人野川まなび館の教員にもご協力を頂いた。

1. [ガイダンス] 受講方法説明
2. 地域の宝としての最上川
3. 最上川の地層と化石
4. 最上川流域の歴史(古代)
5. 最上川流域の歴史(中世)
6. 最上川舟運の地形とくらし(1 本流)
7. 最上川舟運の地形とくらし(2 支流)
8. 最上川流域のむら・むらの動き
9. 利水・治水における安全率の考え方
10. 最上川舟運の特色
11. 最上川舟運と諸川岸
12. 地域づくりの視点と手法
13. 最上川の水質と環境
14. 最上川の景観と人の関わり
15. まとめ

次節以降では私が担当した「地域の宝としての最上川」での講義内容を基に、地域資源としての最上川とその地域づくりのための利活用の手法について述べて行きたい。

2. 地域資源とまちづくり・地域づくり

2-1. 地域の宝＝地域資源とは

近年、地域の宝と言えるような、さまざまな特徴ある物産や歴史・文化などがまちづくり・地域づくりの現場で重視されるようになってきている。このような観点で言えば最上川はまさに山形県が誇る地域の宝であり、地域の活性化という観点からも重要な役

割をはたすことになるだろう。そこで本節では、地域の宝＝地域資源とまちづくり・地域づくりとの関係について概説し、次節以降で具体的に地域資源としての最上川の重要性やその活用方法について考える。

さてここではまず地域資源とまちづくり・地域づくりとの関係について述べるが、最初に「地域資源」とは何かを確認しておきたい。三井情報開発総合研究所 [2003] によれば、地域資源とは「地域内に存在する資源であり、地域内の人間活動に利用可能な（あるいは利用されている）、有形、無形のあらゆる要素」（同書 3 ページ）と定義しており、具体的に「地域条件（気象・地理的条件など）」「自然資源」「人文資源（歴史、人工施設、人材など）」などの形で整理されている。

それでは、なぜまちづくり・地域づくりを考える際に地域資源が重視されるのだろうか。この理由を田村 [1999] で述べられている、まちづくりに関わる議論から考えてみよう。同書には、「まちづくりの実践」とは何かという問題に関連して、以下のよう

「まちづくり」の実践の基本には「理念」や「理想」がある。それが「現実」と食い違うときに、現実を理念に近づけるようにする行動の全体が実践である（中略）ここでいう理念や理想は抽象的なものではない。地域に密着し現場を持っており、地域の実情のなかから必然的に生まれた理念である（田村 [1999] 41 ページ）。

この文章に描かれているように、まちづくりの実践とは自分の住んでいるまちに対し持っている「理念」・「理想」と「現実」との差を埋めるための行動と考えられる。具体的な例をあげれば、次のようになるだろう。

現実→商店街に人がいない
 理念→若者が集う商店街にしたい
 実践→若者向けのテナントを誘致する

このときに大事なポイントは、「理念は地域に根ざしたものでなければならない」ということである。つまり地域の実情を無視した理念を立てても成功しないということであり、このことは例えば、地域の環境と全く合っていないリゾート施設が破綻する一方で、そこにしかない食文化を観光の核にすることにより観光客で賑わっている地域がある、といった例を見ると明らかであろう。

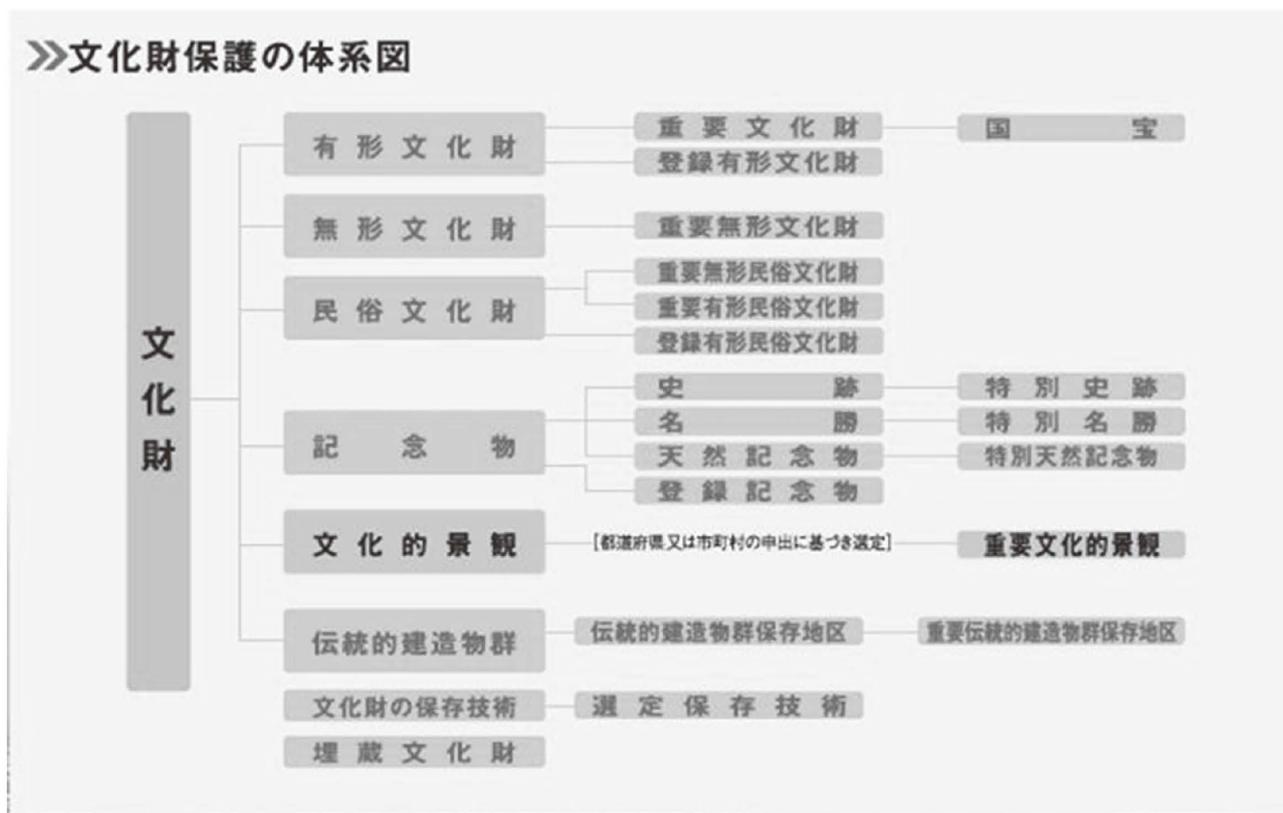
それでは、それぞれの地域にあった理念を作るにはどのように考えていけばよいだろうか。そのためにはまず各地域にどのようなまちづくりのための資源があるかを確かめることが必要となる。そしてそれらをどのように活用していくかを考えることを通じて、地域の実情に合った実践が生み出されることになる。

以上のような地域資源とまちづくり・地域づくりとの関連を踏まえた上で、次に最上川に存在する地域資源について、「文化的景観」という観点から考えてみたい。

2-2. 最上川流域の文化的景観

文化財保護法によれば、文化的景観とは「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と規定されており、風土に根ざして営まれてきた人々の生活や生業の在り方を表す景観地ということができる。平成17年には文化的景観の保護制度が始まり、文化的景観の中で特に重要なもので保護の措置が講じられているものについては、都道府県または市町村の申出に基づき、国から重要文化的景観に選定されることとなった。

山形県では現在「最上川流域の文化的景観」の重要文化的景観への認定を目指しているが、特徴的な文化的景観として、自然、流通・往来、川絵図、文化、河川利用に関わる地域・史跡等が取り上げられている。具体的な例として、例えば舟運に関わる文化的景観としては以下のような地域が取り上げられている（詳細については山形県教育委員会 [2012] を参照）。



図表1 文化的景観の位置づけ（山形県教育委員会 [2012] 3 ページ）

- 長井（長井市）
- 糠野目（高島町）
- 黒滝（白鷹町）
- 五百川峡谷（白鷹町・朝日町・大江町）
- 左沢（大江町）
- 三難所（村山市）
- 大石田（大石田町）
- 川前（大石田町）
- 烏川と清水（大蔵村）
- 本合海（新庄市）
- 最上峡（戸沢村）
- 清川（庄内町）
- 酒田（酒田市）

地域資源という観点から見れば、上記のような最上川の文化的景観は、それぞれ2・1節で取り上げた「地域条件」「自然資源」「人文資源」の構成要素と言えるものであり、したがってこれらのリストは貴重な文化的景観を示しているのと同時に、最上川流

域に存在するまちづくり・地域づくりに活用しうる地域資源を描き出していることがわかるだろう。

本節では文化的景観という観点から最上川に存在する地域資源を概観したが、次節では地域資源としての最上川の利活用の姿について、長井市を例として説明する。

3. 地域資源としての最上川の利活用:長井市を例として

3-1. 長井市の地域資源

長井市は最上川上流域に存在する人口約3万人の地方都市であるが、その風土と歴史は最上川を中心とする河川によって形成されてきた。長井市役所 [2012] によれば、長井市と河川とは以下のような密接な関係があると述べられている。

長井の地名は「水の集まる所」に由来しています。山々には、無数の沢が走り、市内を流れる置賜野川、置賜白川、最上川に注ぐ「水」の豊かな地です。

野川は長井市の水瓶として、市民生活にとって重要な役割を担っています。この川は、朝日連峰の平岩山を源として広い流域から水を集めます。奥深い谷間の豊富な残雪は、少しずつ融けながらも夏まで水を蓄え、緑豊かなブナ林は保水力があり、「緑のダム」の働きをします。さらに先人の努力によって建設された木地山ダムと、新たに平成23年3月に完成した長井ダムが大切に水を蓄えています。

最上川は約300年前、上杉米沢藩の舟運をもたらしました。長井には藩の陣屋も置かれ、商人町として栄え、上方との文化交流が始まったのです。そして、今日の芸術、文化を愛する風土が生まれることになりました。

その後も、豊かな水資源により、製糸業、電子産業が発展し、まちの基礎がつけられました。市街地には今も網の目のように水路が走り、昭和30年代までは、家の中に水を引き入れ、生活用水として活用していました。現在でも消流雪のための水路として活用されています。

長井市の上水道は豊富な朝日山系の地下水を原水としています。口当たりがよく、大変おいしい水として評判です。

その川原では、毎年山形の秋の風物詩・芋煮会が開かれ、大勢の仲間や家族連れの市民で賑わいます。

また、市内各神社に伝わる黒獅子の幕には、さざ波の模様を取り入れたり、市の史跡である宥日上人の火伏せの水など、深く水や川に関わる伝統文化が根づいているのです。

無意識の中に水の持つ奥深い歴史を心にきざみながら、今も「水のまちながい」として市民を中心としたまちづくりを進めています（長井市役所 [2012]、5ページ）。

長井市の中心市街地は、最上川舟運の発展とともに町並みが形成されたのであり、最上川本流に物資を運ぶための支流や船着場に向かう道沿いに、かつての繁栄を示す歴史的建造物が多く残っているのが特徴である。

最上川に関連する長井市内の主な地域資源として、次のようなものが存在している。

- ・舟運に使われた河川と蔵（やませ蔵等）
- ・舟運による繁栄から生まれた、中心市街地の歴史的建造物（丸大扇屋、芳賀醤油店等）
- ・地下水



図表2 舟運に使われた河川と蔵（右がやませ蔵）



図表3 歴史的建造物（丸大扇屋）

以下では、長井市における最上川に関連した地域資源の具体的な活用事例と、今後の活用の方向性について述べる。

3-2. 自然資源としての水を活用する：水道水の商品化

長井市の水道水は全て40m以上の深井戸から取水する100%の地下水であり、まろやかで爽やかな味わいが特徴である。水道水を全て地下水で賄うこ

とは全国でも珍しく、その味もおいしいことから、2008年にこの水道水をペットボトルに詰め商品化することとした。市民からの公募により「山紫水明の郷長井花のしずく」と命名され、1本110円で販売されている。

またこの他に、平成23年度に実施された市民によるまちづくり研究会である「ながい市民未来塾」においては、長井のおいしい水の活用策として地ビール、地サイダー、ジュース等の開発が提案されており、市民レベルにおいても水資源の活用について注目が集まっていることがわかる。

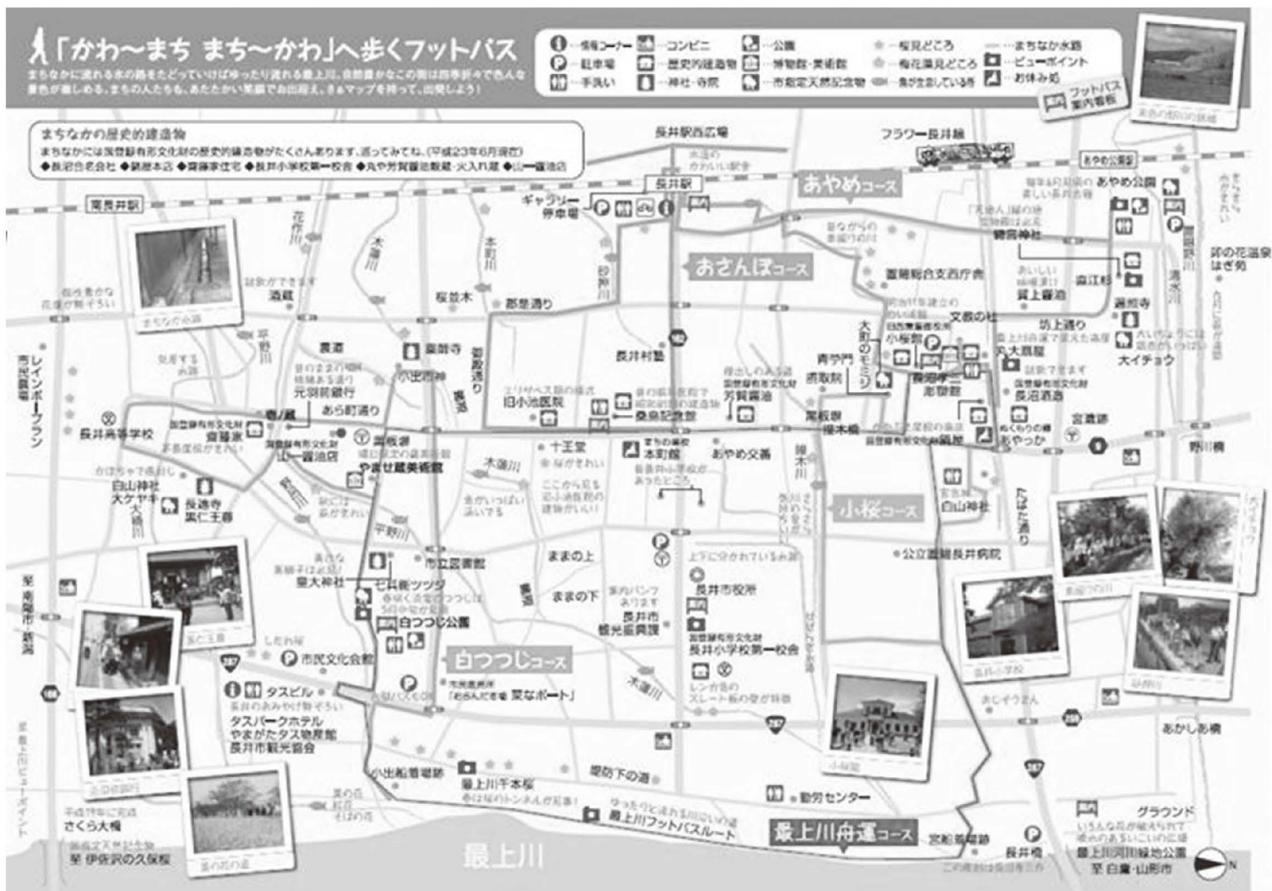
3-3. 歴史的資源を観光資源に変える：フットパス

長井市は、古くから市民の生活の拠り所であり文化の形成に寄与してきた最上川の役割を重視し、平成12年に川沿いに散歩できるフットパスを日本で初めて整備した。平成23年には日本フットパス協会シンポジウムが開催されるなど、積極的にフットパスによるまちづくりを進めている。

フットパスとは、イギリスを発祥とする森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと（Foot）ができる小径（こみち）（Path）のことであり、近年日本においてもさまざまな地域において各々の特徴を活かした魅力的なフットパスが整備されている。

長井市のフットパスの特徴は、最上川の流れそのものや、舟運によって形成された町並みをコースに組み込んでいることであり、これが他の都市にはない独特の個性を生み出している。例えば「最上川舟運コース」では、以下のようなコースにより最上川舟運に関わる歴史的資源を探索することができる。

- 小桜館（旧西置賜郡役所）→丸大扇屋
- ぬくもりの郷あやっか→宮船着場跡
- 小出船着場跡→やませ蔵美術館（旧袖問屋）
- 芳賀醤油店→小桜館



図表4 長井市フットパスコース（長井市HPより）

地域資源を活用するという観点から見たフットパスの意義は、まず地域の歴史的・文化的資源を観光資源に転換し、観光振興のために役立てることができるということである。またそれにとどまらず、フットパスを整備する過程において地域住民自身が地域と向き合い、地域の良さを見つけ出しそれを継承していくという、地域の魅力の再発見・育成にも繋がる取り組みにもなっている。最上川の果たしてきた役割を理解するためには、その流域に暮らしてきた人々の歴史や営みを結びつけて考えることが必要であるが、フットパスはこの結びつきを体験しながら確かめることができるという意味で、重要な役割を果たしているといえるだろう。

3-4. 歴史的資源活用の可能性：滋賀県長浜市

ここでは少し視点を変え、既存の歴史的資源に新たな価値を加えることにより新たな地域資源を創造することに成功した、滋賀県長浜市の事例を取り上げる。長井市を含め最上川流域には数多くの歴史的資源が存在しておりそれ自体独自の価値を持つものであるが、工夫次第ではさらにその価値を高めることができることを長浜市の事例は示しており、今後の最上川流域の地域資源の利活用を考える際の参考となるだろう。

長浜市の「黒壁」は、歴史的資源を活用し中心市街地を活性化したまちづくりの成功例として有名である。中心市街地に残る歴史的建造物である「黒壁」を保存するための第3セクターが設立されたのがその始まりであるが、田村[1999]によれば、この第3セクターが民間主導で商店経営者でない人物により運営されたことから、過去を生かしながらそこにとらわれない自由で創造的な発想を実践できたことが成功につながったと評価されている。

歴史的建造物の保存といえば通常博物館等への活用が考えられるが、黒壁の場合には旧中心市街地の核となる建物ということもあり、より集客力のある活用法が必要とされていた。新たな発想の契機は、活用方法の検討時に行った小樽市の視察によって生まれた。小樽市も小樽運河周辺の歴史的建造物で有名であるが、古い倉庫を活用してガラス工芸品を販

売している姿を見て、歴史的建造物とガラス工芸という一見相反するものが意外な調和をもたらしていることに気づいた。この経験を機に、歴史的建造物とガラス工芸との組み合わせという新たな資源活用方法が生み出されたのである。黒壁は「黒壁ガラス館」として蘇り、この成功を起点として現在長浜市中心市街地は一大観光地へと変貌している。

田村[1999]によれば、「黒壁」の最も評価される点としては、既存の資源としての歴史的建造物にガラス工芸という新たなものを加えることにより、大勢の観光客を呼ぶ新たな資源を創造したということが挙げられる。黒壁という伝統的な建築物群を舞台にしながら、それとコントラストをなすような創造的な「まちづくり」を展開した結果、その面白さが人を引きつけると考えられている。近年全国的にも既存の蔵をカフェや店舗として活用している事例が増えているが、その成功の背景には上記のような新たな資源の創造という側面があるのであり、今後最上川流域の歴史的資源を活用する際にもこのような視点が必要となるだろう。

4. おわりに

4-1. 最上川俯瞰講義の意義

最上川流域にある山形らしい自然、産業、伝統芸能・文化を生かすことは山形県の今後の発展にとって非常に重要なことであるが、その全体像を学術的に把握する機会はこれまで十分に確保されていなかった。「最上川俯瞰講義」はこのようなニーズに応えるために設置された科目であり、文系・理系の枠を超えて最上川を多面的に学ぶことを通じて、学生がその独自性と多様性を学ぶことができるようになっている。

最上川をさまざまな研究分野から多角的に検討するという講義を行うことが可能となったのは、「大学コンソーシアムやまがた」という仕組みを通じて大学・学問分野の枠を超えて教員を集めることができたことによる。また一部の講義についてはコンソーシアムが開催する公開講座「山形夜話」において一般市民向けに開講されており、学生のみならず市民が最上川について学習する機会も確保されてい

る。

これまで見てきたように、最上川流域にはさまざまな地域資源が存在する。これらを教育・研究資源として活用し、魅力ある教育機会の提供や学術研究の成果を発信することは同時に、最上川に河川等に関連する教育・研究資源としての新たな役割を与えることを意味している。また最上川を利活用した教育は山形県における河川と関連した自然・文化を理解することであるが、それだけではなく河川と人間との共生関係、さらには地球規模の環境問題といったグローバルな課題に対する知見を深めるために有効であろう。

4-2. 地域資源としての最上川の利活用

最上川流域のさまざまな地域資源が織りなす景観、歴史、文化などが各地域の個性を生み出していることからわかるように、それぞれのまちや地域の個性は、それらが保有する資源の形態や水準の違いによって特徴づけられる。そしてまちづくり・地域づくりによる活性化とは、そこに存在する資源がどのように活用されているか、またどのような成果を生み出しているか、という2つの側面から考えることができる。これは、

地域の資源→活用（創造）→成果

という図式でまとめることができ、与えられた地域の資源の下で成果の水準を増加させることが「まち・地域の活性化」を意味するのである。そしてそれぞれのまちや地域の持つ資源は異なるため、何が

存在するか、そしてそれをどう活用していくかを考えることが、個性あるまちづくり・地域づくりに不可欠である。

本稿では最上川流域の地域資源を文化的景観という視点から軸に見てきたが、この視点は最上川の歴史的・文化的意義を理解するのみならず、今後最上川を県内市町村の活性化のために活用する際の特徴や重要性を理解するためにも有益である。地域資源の活用という観点で見れば、自然、景観、歴史はそれ自体価値あるものであるが、これらから具体的な活性化の成果を生み出すためには、どのように利活用するかという観点が不可欠である。歴史・文化資源それ自体の価値を活かすだけでなく、長浜市の事例のように現代的価値を加えて活用する方法も検討すべきであろう。

参考文献

- 北川忠明・山田浩久編 2013 『地方都市の持続可能な発展を目指して』山形大学出版会。
田村明 1999 『まちづくりの実践』岩波書店。
長井市役所 2012 『平成24年ながいのあらし』。
本間義人 2007 『地域再生の条件』岩波書店。
三井情報開発株式会社総合研究所 2003 『いちから見直そう!地域資源：資源の付加価値を高める地域づくり』ぎょうせい。
山形県教育委員会 2012 『私たちの最上川を未来へ—最上川流域の文化的景観—』。